

# グロテスク～ Aゴシックすごい

GE Gravenによる



## 第12章



フランス、ランス ～ シャトー・ド・ブラシ ～ 1348 年 6 月

6月の午後遅く、燃えるような色彩が沈みゆく空を覆い、絵画のような夕焼けが始まろうとしていた。ブラージはアルゼーの2階の寝室の窓ガラスに顔をしっかりと押し付け、外を覗き込んでいた。彼の息がガラスに結露し、豊かな髭の近くに不透明な光の輪を作っていた。部屋に残る夏の暑さの中、彼のこめかみに一筋の汗が流れた。脚全体に広がる、くぼみと変色した皮膚の醜い傷跡にもかかわらず、彼は誰の手も借りずに立ち、それ以外は健康そのものだった。彼の傍らには木製のテーブルがあり、レネがクレシーでの最後の任務の数日前にアルゼーに贈った、埃っぽい紙の花瓶が置かれていた。ぼろぼろになった花びらは、飢えた蛾が食い荒らした証拠だった。

窓辺の土台に沿って、山積みになって乾燥していた。

「まるでアリの列のようだ。誰がこいつらを埋葬するんだ？」ブラージはそう呟き、ガラスのような目を遠くに向けたままだった。ブラージ家の領地の始まりを示す幹線道路には、疫病に感染した通行人が絶え間なく列をなしていた。ブラージは高い場所から遠くを見下ろし、彼らを幽霊のような虫の果てしない列として見ていた。

街から流れ出て、田園地帯へと消えていく。若者も老人も、金持ちも貧しい人々、男も女も子供も、皆一斉に、まるで絞首台に送られた都市全体の最後の行進のように、外見上は動いていた。大勢の人々が逃げ惑う中、ほとんどはわずかな荷物を抱えて徒歩で進んでいた。かろうじて自力で歩ける者もいれば、歩く死体のようによろめきながら進む者もいた。時折、荷物を満載した馬車が、北へ漂う人々の列の中央を横切り、車輪は道端に点在する死後数日の死体をかろうじて避けていた。ブラージは窓ガラスの曇りを拭いた。「町全体、いや、無数の都市を埋葬するのに十分な聖地はどこにあるというのだ？この疫病は計り知れない狂気だ。」

アルサエが肩越しに彼に呼びかけると、ブラージは彼女の声に緊張が高まっているのを感じた。「もし彼らが近づいてきたら、入れないで、フランソワ。私たちは彼らを助けることはできないわ。私に言って、そんなことはさせない！」

「ドアと窓はしっかり施錠しました」とブラージはガラスに顔を押し付けたまま、あっさりと答えた。「これ以上安全な状態は期待できません。」しばらくしてアルサエは彼を叱責した。「城から出て行くように頼んだでしょう！私たちは重大な危機に瀕している。なぜ私があなたに説得されてしまったのか、全く理解できない。恐ろしいことが起こるだろう。不吉な予感がする！」ブラージは返答を拒否し、代わりに混雑した道路をじっと見つめた。

「まだ時間はあるぞ、フランソワ！よく聞け 厩舎の裏には、森の中を通る草木が生い茂った小道がある。ルネはよくそこを通過して荷車を引いていたんだ。荷車に荷物を積んで、お前の馬を繋げばいいんだ」

ブラージは彼女の言葉を遮った。「もう遅いよ、アルサエ。」

「違う！もしマイケルがあなたの執念によって死んだら、あなたはそれを耐えられるのか？」

十字架？ジャン＝フランソワ・ブラージさん、あなたにはできるのですか？

「彼は無事です」とブラージ氏は述べた。「そして、あなたも無事です。私たちの信仰があれば、きっと大丈夫です。」

アルサイはため息をつき、ぶつぶつと呟いた。「主がお許しくださるならば、だが、どうか主がお許しくださるよう祈る。」

ブラージはうなずいた。「そうするだろう。」

「それに、フランソワ、マイケルにあの手にも負えない馬に乗るつもりだと内緒で言わないでくれ。私が言った通り、もう一頭の馬を飼っておくべきだったんだ。」

ブラージは眉をひそめ、肩を落とした。「またそのことをじっくり考えなければならないのか？」

「そうしなければならないわ！」と彼女は叫んだ。「あなたがそんなに多くの秘密を守るつもりなら、そうしなければならないのよ。あなたは私があなたの兄の熱心な妻であり、あなたの甥の愛情深い母親であることを覚えていないの？」

私はいつもあなたにこのささやかな家を開放してきたではないか？困っている時にはいつもあなたを助けてきたではないか？

私はイギリス人ではない、フランソワ。そして、あなたの兄弟を殺したのも私ではない！

ブラージはくると振り向いた。目は赤く腫れ上がっていた。「なぜ私をこんなに苦しめるんだ？一体何をしているんだ？」

そうでなければ、私からの願いですか？

「真実を知りたい！」アルサエは叫んだ。「お願いだ。」

「ああ。」ブラージは頭を下げてくすくす笑った。「真実だけを話したのか？」

「はい。ジャン＝フランソワに、ブラージ枢機卿が私に隠してきた真実をすべて話してもらいたいのです。このささやかな願いを叶えていただけませんか？」

ブラージは彼女の率直だが一見不可能な要求を考えながら部屋を見回したが、寝室のどの備品も彼の視線を惹きつけ、彼女の要求を退けることはできなかった。

彼女は熱心に見つめていた。彼は唇を噛み締め、肩を落とし、大きくため息をついた。「どうしてもと言うなら、すべて話そう。」彼は彼女に背を向け、窓の外を見つめてから続けた。「そして、真実を知った時、私のこと

を許し、そして、私が当初すべてを正直に話さなかった理由を理解してくれることを願っている。」

アルゼーは彼をたしなめた。「本当のことを言うんだ、フランソワ。」

ブラージは従った。「では、話しましょう。それはアヴィニョンのシャトー・ルージュにある私の部屋、私のアパートで始まりました。私が目を覚ますと、思いがけない訪問者がいたのです。」彼は窓枠に寄りかかり、行き交う人々を眺めながら、すべてを告白した。ジャックの霊を目にするという幸運な機会、外典への困難な入り口、聖座によって隠されていた門石の発見、フィリップ王とクレメンス教皇、そして融資を含む教皇の計画、ボーン大尉とヴォーニヒ修道院長、ガルディアン修道院での苦難の滞在、最終的に門石が開かれたこと、そして大尉の馬に乗って修道院から間一髪で脱出したひどい怪我のことまで。ブラージが語る回想の間中、アルサは一度も口を挟まなかった。最後にブラージは振り返り、「これで全てだ。全てを話したぞ、アルサ。」と言った。

アルサイは震える指で隣のテーブルを指さした。「あそこの古い書類のことですか？ あなたがおっしゃっているのは、あの書類のことですか？」

ブラージはテーブルから少し身を離し、罪悪感を感じながらうなずき、「ほとんどはそうだ」と認めた。

他のものは風に消えてしまった。」彼は向きを変え、混雑した道路に再び注意を向けた。

道。彼はため息をついた。「もう話すことはない、アルサイ。今まで明かさなかったことを許してくれ。」ブラージは厳しい非難を覚悟して顎を突き出し、身構えたが、二人の間には墓場のような静寂が漂っただけだった。

やがてアルサエは、再び力強く沈黙を破った。「マイケルの声が聞こえない！もしかしたら外にいるのかも 彼らと一緒に。フランソワ！」

「心配しないでください。彼は休んでいますから」とブラージは彼女を安心させた。「できる限り安全な場所にいますよ」。彼は窓の外を覗き込み続け、少し視線を移して、大きく枝を広げた古木のポプラの木を見つめた。

「素晴らしいわ」と彼女は答えた。声はよりリラックスしていて、おそらくほんの少しのユーモア。「フランソワは一日中元気いっぱい、私を疲れ果てさせたわ。本当に元気いっぱい、父親そっくりよ。いつかきっと、幸運な女性の心を射止めるでしょうね。私だ。そして、彼の魅力に心を奪われる女は災難だ。」

ブラージはむせび、新たな涙が頬を伝って流れ落ち、顎鬚の中に消えていった。「私たちは無事だ」と彼は答え、ポプラの木の下にある、土盛りのついた小さな木製の墓標をじっと見つめた。彼はつい昨日、その少年を埋葬したばかりだった。アルサエは自ら告白した。「あなたに伝えたいことがあるの。私も正直に話すわ。あなたが寝ている間に、パン屋に焼きたてのパンを買いに行ったの。お腹を空かせておいてくれた方がいいわ。お皿にはパンが山盛りよ。それに、あなたの弟が夕食に加わることを知ったら喜ぶかもしれないわね。」彼女はくすくす笑った。「今度は日没前に着くって約束してくれたのよ。あら、聞いて！もうすぐ来るわ。レネ！」アルサエは深くため息をついた。

「休まなくてはならない。食べ物と水と清潔なシーツを持ってこよう」とブラージは言いながら窓から体を離し、ベッドの端にぐったりと横たわり汗びっしょりになっているアルサエに目を向けた。彼女の繊細な上向きの腕はマットレスから伸び、宙に浮いたまま、まるで目に見えない何か、あるいは誰かに手を伸ばしているかのようなようだった。彼女の指先は黒ずんでいた。微笑む唇は黒く乾ききっており、その虚ろな視線は天井のしわ以外には何も捉えていなかった。

翌日、ブラージは古いポプラの木の下で、新しい土の山の間を縫って、シャベルで土をすくい、アルゼーの墓にかけ、かつて名声を博したブラージ家の最後の親族を覆った。彼はシャベルを地面に突き刺し、折れた根を足で掻き分けていたところ、城の正面玄関に荷物を満載した荷車が停まっているのを見つけた。ブラージは太陽の眩しさから目を覆い、招かれざる客をよく観察した。病弱そうな通行人を背景に、御者は停車したまま、まるで恥知らずな覗き見趣味の人のように彼を見つめていた。布切れが頭に完全に巻き付いており、目があるはずの場所に暗く切れ込んだ部分だけが露出していた。つばの広い帽子をかぶったミイラのようなようだった。御者は長いコートを羽織って、真昼の太陽の下に座っていた。不吉な外見と無表情な顔つきから、もし彼が白昼堂々と姿を現さなかったら、ブラージは彼を死神そのもの、死体運搬車に乗った死神だと勘違いしたかもしれない。しかし、外見上は異様なその見物人がそれ以上近づく気配を見せなかったため、ブラージは彼を追い払い、より深刻で差し迫った問題に注意を向けた。

枢機卿は木の根元から熟成酢の入ったフラスコを取り出し、新たに聖別された中身をアルゼーの墓に振りかけ、マイケルが無邪気に唱えた言葉を唱えた。

他の言葉で言えば、そう見なされた。ついに、彼の言葉が終わると、ブラージは膝をついて彼女の墓地の端に立ち、別れの挨拶で祈りを締めくくった。「アルサエ・ブラージよ、キリストにあって神と共にお過ごしください。レネー・ブラージの愛する妻、マイケル・ブラージの愛情深い母よ。アーメン。」

彼は十字を切って静かに頭を下げ、静かに敬意を表し、そして過去を振り返った。そして、宙ぶらりんの瞬間、鳥のさえずりが聞こえない中で、夏のコオロギの単調な鳴き声中で、日中の痒みと目眩がするような暑さの中で、彼の孤独な境遇が明らかになり、そして、どんなに許しを請う言葉も永遠に耳を塞ぐ死人に届くという不安な啓示の中で、ブラージは涙を流した。彼は膝をつき、土盛りの上に倒れ込み、まるで何かに導かれるかのように、両手いっぱい土を握りしめて固めた。

神の手段、その瞬間をよりしっかりと把握することは、アルサエを外から圧力をかけるのに役立つかもしれない彼女の末期状態。そこで、ポプラの木の下で、汚れた手と激しいすすり泣きの間から、嗚咽の洪水が土を濡らした。そして、そこで、ポプラの木の下で、ブラージは失望の繊細な味に溺れ、圧倒的な虚無感に浸り、後悔と悲しみの熱烈な混ざり合いに身を沈めていた。

「ボン・アプレ・ミディ、ムッシュ！」予期せぬ電話にブラージは驚き、我に返った。理屈がわからなかった。彼は飛び上がって、何も知らない犯罪者のようになると振り返り、目をこすって近づいてくる御者と揺りかごを見つけた。見知らぬ男は帽子を脱ぎ、頭に巻いていた布をほどき、長いコートを脱いだ。彼は、こけた顔と濃い髭を生やした中年男性であることが明らかになった。目の下の目立つクマは、彼が疲れた旅人であることを示唆していた。御者はゆっくりと近づき、歓迎するように手を振った。「Comment allez-vous?

ブラージは手を上げて彼に命じた。「馬を止めろ！」彼は木の下から飛び出し、空き地へと横歩きで進んだ。「これ以上進むな！」御者は即座に立ち止まり、馬はきつく引かれた手綱に抵抗して何度か首を振った。ブラージは城を指さしながら彼に叫んだ。「この荘園の主人は軍隊を率いている！すぐに立ち去るか、さもなくば主人の手に殺されるぞ！」

「ジャン・ラバトゥと申します」と荷馬車の持ち主は声をかけ、自己紹介をした。「マルセイユの著名な商人です。領主様にご迷惑をおかけして申し訳ございませんが、もしお許しいただければ、ぜひともご謁見させていただきたいと存じます。」彼は袖で額の汗を拭いた。「悪意は一切ございません。ただ、祈りと善意をお伝えしたく、この困難な時代において、領主様にもきっと喜んでいただけるものと存じます。」

ブラージは荷車に近づき、彼をじっと見つめた。「善意を示してみろ。」男は咳き込み、ただうなずきながら指を突き出した。

ポプラの木の根元に身をかがめ、かすれた声で答えた。「新しい墓を用意するのか」。彼はごくりと唾を飲み込み、咳払いをした。「ここは聖地だ、そうだろう？」

「C'est ainsi, ブラージ氏はそう断言した。

「きちんと祝福されたの？司祭によって？」

“C'était ainsi, 「」と彼は再び確認した。

男は鼻をすすり、何か特別なものを探しているかのように、敷地を注意深く調べた。「この敷地のどれくらいの部分が聖地として指定されているのですか？」彼の視線は再び木に留まり、一番高い枝から根元まで、じっくりと眺めた。

「もう十分だ。一体何を求めているんだ？」

「もしご主人がお許しいただけるなら、私の全ての商品と引き換えに、簡単な奉仕をさせていただきたいと存じます。」

ブラージは城の入り口をちらりと覗き込んだ。「彼は私以外とは誰とも話さない。あなたの提案を聞かせてくれれば、すぐに伝えよう。」

「はい。もしご主人様がお望みなら、そうしたいのですが…」男は顔をしかめて、無精ひげを搔いた。髭を生やしながら、善意をどう伝えるのが一番良いか考えていた。「商人が到着し、彼の荘園全体に数シーズン分の物資を供給できるだけの商品を積んだ荷車が来たことを彼に伝えてください。」彼は肩越しに覗き込み、商品をざっと見てから、長年の巧みな商取引で磨き上げられた有能な商人のように、在庫を列挙した。「新鮮な穀物、ドライフルーツ、塩漬け肉、菓子類があります。ランプ油、香料、軟膏、布、革、薬があります。塩とあらゆる種類の治療薬や薬草が豊富にあります。調理用鉄器、陶磁器、

銀と金の食器は、どんな貴族の邸宅にもふさわしいものです。それに、フランスで一番美味しいワインが入った、まだ開けていない樽もあります。」彼は振り返り、ブラージの目をじっと見つめ、うなずき、愛馬と荷馬車に差し出すように手を差し出し、厳かに言った。「この立派な馬と頑丈な荷馬車も、ご主人がお望みであれば、私の物々交換の一部です。どうかご主人にお伝えください。これらすべてをお渡ししますので、私にほんの少しのお金さえいただければ結構です。」

リクエスト。"

見栄えの悪い状態ではあったものの、商人は実に完璧な身なりをしており、狡猾な枢機卿の注意を惹きつけた。ブラージは馬の脚、歯、目を調べたところ、その馬は若く筋肉質な立派な馬で、太陽の光を浴びると深紅の光沢を放つ、傷一つない毛並みをしていた。彼は目を細め、疑念を抱き始めた。「それで、一体どんな簡単な依頼なのですか？」

男は荷車の中で身じろぎをした。咳払いをして言った。「疫病にかかってしまいました。しかし、私の持ち物全てと引き換えに、せめて神聖な土地を少しだけ分けていただき、きちんと埋葬させていただければ幸いです。」

ブラージは数歩後ずさり、指を組んで、異例のことを考えた。

要求。彼はポプラの墓と病弱な商人の間をちらりと見てから、病に冒された見知らぬ男の提案を退けようとした。「私はもう信じない

男は口を挟み、「お願いです！」と敷地の奥の方を指差した。「私は城の外、荷車の中にいられます。あそこ、森の端の方に。世話は一切必要ありません。」彼は布で首を軽く拭きながら、懇願を続けた。「私の命は残りわずかです。あと一日あれば、もう誰にも迷惑をかけません。墓標さえもありません。ただ、聖なる地に一区画だけください。」

ブラージは商人の荷車を念入りに調べた。荷車にはかなりの量の荷物が積まれており、元の設計から大幅に改造されているようだった。荷車の四方には無数の垂直の板が立てられ、それぞれに金属製の留め具が付いていた。その留め具からロープの網が張り巡らされ、荷車の中にぎっしりと詰め込まれた食料の山を貫いていた。荷車の車輪がどうやってこれほどの重さを支えているのか不思議に思いながら、ブラージは車輪の異常な幅に気づいた。ブラージの視線は、麻袋の束の後ろから覗き込んでいるように見える小さなワイン樽の最上端に止まった。彼は深呼吸をして肩越しに、城の裏手、雑草が生い茂る野原、そして領地の境界線を示すさらに遠くの森の列を見渡した。彼は男の方を振り返り、明るい光の下でその顔をじっと見つめ、商人の申し出が本物だと感じた。結局、死は確かにその存在を主張し、男の苦悩に満ちた眼差しの中で完全に熟しきっていた。ブラージはその兆候と印を知っていた。紛れもない運命、死すべき運命、そして全体的な不可解さのオーラが、まるで消えない黒い光のように、男の存在を呪っていたのだ。

枢機卿は古い木に戻ると、彼に合図を送った。「荷車を森の端まで移動させろ。」彼はシャベルを手に取り、城の裏口に向かって歩きながら叫んだ。「返事を持って戻ってくるまで、そこで待っている。」御者はそれに従い、雑草の海をかき分けながら、車輪の下で軋む背の高い茶色の葎の野原を慎重に荷車を操縦して進んだ。

ブラージは城に入り、暖炉と台所エリアに足を踏み入れた。彼はシャベルを隅に立てかけ、ドアを閉めた。立ち上がって首の後ろのざらざらした汗をこすり、彼を包み込む吐瀉物と胆汁の悪臭を無視して

彼は、臨終を迎えた新たな客人をどうするか考えていた。その客人は、来る冬の数ヶ月間を過ごすのに十分な食料を積んでいた。ブラージは、近くのランス市を疫病が襲っている今、その男が荷車に積んでいる食料は、町中の店にある食料の総量よりも多いかもしれないと知っていた。しかし、理性に細心の注意を払い、商人が約束したことをすべて考慮しても、

彼にとって、ワイン樽は、魅惑的な霊薬として彼の心に最も強く印象づけられた。ブラージは、彼の一時的な生活の必需品、もし彼が悩まされる記憶を溺れさせようとするならばマイケルとアルゼー。食べ物や命そのものよりも、ワインは彼の罪悪感を鎮め、たとえ短い間であっても良心を落ち着かせるのに十分だった。

彼はうめき声を上げ、散らばったゴミを蹴りながら、汚れのついた窓に近づいた。青と緑のハエの大群をかき分け、汚れたガラス越しに覗き込み、茎に覆われた畑を見渡して、商人の荷物の一番上の部分が、今は森の奥の端近くに置かれているのを確認した。人影が動き、ブラージは男が荷車の上に高く立ち、あたりを見回しているのを見つけた。どうやら草木が生い茂った敷地を点検しているようだった。ブラージはニヤリと笑い、商人に小声で、いかにも気取った態度で話しかけた。「ああ、死にゆく人よ。その全能性を感じ取れないのか。」

息をするたびに？それはどこにでもある。私たちのあらゆる動きに、腐敗が蔓延しているのだ。死は不滅だ。それは人生の本質であり、私たちすべてよりも長く生き続けるだろう。」彼は酔っぱらいのようにくすくす笑い、窓からよろめきながら離れていった。

ブラージは散らかった床を見つめ、徐々に表情がこわばり、笑顔が消えていった。顎をきつく引き締め、片方の目は石畳をじっと見つめていた。その時になって初めて、周囲に充満する悪臭に気づいた。そして、部屋の中央に置かれた、絵のように美しい静物画のような光景 粗削りの大きなテーブルとその生々しい中身 に気づいた。テーブルは使い古された祭壇のようで、汚れたリネンが山積みになって天板と側面に溢れ出していた。血痕やその他の体液が布を固くし、不規則な形の硬い層にしていた。その中に、熱を洗い流そうと必死に体を洗った痕跡として、こびりついた木製の洗面器が置かれていた。ハエが縁にたかり、ブラージは唇をすぼめて、その粗末な光景をじっと見つめていた。

「だめだ！」彼はゴミをかき分けながら叫んだ。「お前は決して」  
ブラージはテーブルの端をつかんで持ち上げ、ボウルが床にガチャンと音を立ててテーブルを横倒しにした。ハエの大群が舞い上がり、部屋は一定の低い唸り声に包まれた。「絶対にだめだ！」  
彼は後ろに飛び退き、何か特定のものを探しているかのように、部屋の壁や天井を必死に探した。ブラージは両腕を広げてぐるぐる回り、囲い全体に向かって笑いながら叫んだ。「私を見る！私はまだここにいる！お前たちは何もしていない！私に触れることなどできない！お前たちは私を恐れている！お前たちは決して」  
ブラージはハエを叩き落とそうと頭の周りで両手を振り回したが、ゴミの中で足を踏み外してしまった。頭頂部を床に強く打ち付け、意識が朦朧とした。  
そして彼は死んだようにじっと横たわり、マイケルの声の記憶が彼の存在を苦しめていた。「私は」

「天使になって翼を生やして、すごく速く飛ぶんだ。そうすれば悪魔に捕まらない！」ブラージはうめき声をあげ、目を開けると、顔の横に手があり、擦りむいた指の関節の上にハエが止まっていることに気づいた。しばらくの間、彼は敷石の上に横たわり、その虫が足をこすり合わせるのを見ていた。その虫の大きな深紅の目は彼を見つめ返していた。それからハエは飛び立ち、彼の顔の前で旋回した。マイケルの声が彼の心の中で続いた。「まるで

「ほら、フランソワおじさん！風みたいだろ？俺がどれだけ速いか分かるか？」ハエは一瞬ブラージの顔にとまり、鼻先から滴り落ちる新しい涙の跡をじっと見つめた。

かつては誰もが欲しがった、他に類を見ないブラージ家の領地の荒れ地に、ハエの羽音の下、枢機卿は心の奥底へと引きこもり、時間と空間から完全に切り離された領域へと向かった。そこは、陰鬱、嫌悪、混乱が歪んだ記憶や悩ましい夢と混じり合い、病的な自己満足、グロテスクなシニシズム、そして不条理なほど不釣り合いな記憶や考察の不自然な混合物という、外見上は異様で不自然に融合した状態を顕現させる場所だった。それはすべて、悲惨な狂気の静かな黒い水たまりから生まれ、鍛え上げられたものだった。鋭い感覚はなかった。

木が割れる音やガラスが碎ける音に似た音 何か壊れたことを示すような鈍い音、ドスンという音、引き裂く音、チリンという音さえも微塵も聞こえなかった。そこにあるのは、途切れることのない静寂だけだった。しかし、その死のような静けさと純粋な超越の状態の中で、ブラージの意識は、ほんのわずかではあったが、徐々に揺らぎ始めた。

枢機卿はくすくす笑いながら床にまっすぐ座り直し、態度を一変させた。乱れた髪をかき上げ、酔っぱらいのように目がうつろで転がりながら部屋の壁を見回した。彼は微笑みながら頷いた。「なるほど、彼は立ち上がり、ズボンの裾についた土を払い落とした。「確かにそうだ」彼は腰に手を当て、壁に向かって言い続けた。「お前たちは私からそれらを奪った。最も親密な喪失感で私を苦しめ、他の皆がこの世の疫病に屈する中で、私をその影響から守ろうとしたのだ。お前たちは私を生かしておき、私がお前たちに長い悲しみを与え、それを永遠に糧にしようとしているのだ」彼は不機嫌そうに手を振って壁たちをあしらひ、気を取り直した。「私から去れ ああ、死と絶望よ  
ほんの少しの間だが、本物の客が舞台袖で待っているのだ」

彼は服を整え、謁見を控えた礼儀正しい高官らしく身なりを清め、かすかな笑みを浮かべ、眉を高く上げ、顎を上げて城から出てきた。

ブラージは背の高い雑草の中を大股で進み、その真ん中で立ち止まり、商人に声をかけ、近づくように身振りでも促した。「あなたと荷車を城の裏口まで持ってきてください！主人はあなたの申し出を受け入れます。ワインと食料と引き換えに、宿泊と食事、そしてきちんとした埋葬をしてください！」

商人は首を横に振った。「ご主人が疫病を家に招き入れてしまうといけいので、ここに留まるのが一番です！」ブラージは彼が荷車から降りてサトウキビ畑に消えていくのを見送った。彼の声だけが彼の行き先を示しており、彼は続けて言った。「ご主人がお望みなら、兵士たちが荷車を降ろしている間、私はこの木の下にいられます！」

「彼はそれを望んでいない」とブラージは叫び、歓迎の手を振って彼を外に出し、「長引く幽霊も、差し迫った死の手も、この家の主人、アクエイリル、ムッシュ・ラバトウよ！」

コオロギの鳴き声以外は、一瞬の静寂が野原を包み込んだ後、商人はブラージに「彼も死にかけているのですか？」と尋ねた。

「彼はそうではない。さあ、あなた自身と荷車を持って来なさい。そうすれば、彼はあなたの願いを聞き入れるだろう。雑草の向こうから、ブラージは男が荷車に乗り込み、自分の方へ向かってくるのを見た。

「ご主人の家には司祭がいますか？」

「彼はしばらくの間、あなたの用事を済ませてくれるでしょう。」ブラージは裏口に戻りながら、彼に城の方へ合図を送った。

「あなたはあの神父ですか？」

ブラージは歩みを止めずに肩越しに叫んだ。「お察しの通り、私は午前。最近では聖別、赦免、終油の秘蹟のことばかり考えているようだ。さあ、来てくれ！空いている部屋があるし、ワインが飲みたいんだ。」

商人は荷車を玄関脇に停め、二人は荷下ろしを始め、屋敷の台所エリアに積み上げた。食料のほとんどを家の中に運び入れ終えると、商人は肩から穀物の袋を下ろし、ブラージが積み上げた同じような袋の上に置いた。商人は倒れたテーブルにもたれかかり、ため息をつきながら不満を漏らした。「自分の荷車を降ろすのが取引の一部だとは思っていなかった。」彼は家の中の奥や二階へと続く入り口を見渡した。ため息をつき、額の汗を拭き、ブラージに尋ねた。「ご主人様の召使いはどこにいるんだ？馬鹿げている。寝ているのか？彼らを生かすために食料を運んでいる間、私は死にそうだ。」彼は首を振り、顔をしかめた。「そして、ここには何があるんだ？この悪臭、この無駄、どうしてご主人様は許すんだ…」

商人はハエがたかり汚れたリネン類をざっと見渡し、ブラージの方を向いて彼をじっと見つめた。「死はここにあった。城の中で生き残ったのは君だけだな？」

ブラージは彼に近づき、テーブルに寄りかかり、首を横に振った。彼は商人をじっと見つめ、微笑んだ。「死はここから去った。そして実際、兵士はいない。しかし、師はここにいらっしゃる。」

「咳もくしゃみも聞こえない。このしつこいハエ以外に生命の兆候は何もない」と彼は反論した。

彼は唇をすぼめ、目の前で手を振って退けた。「あなたがその師匠ですか？」

ブラージはくすくす笑った。「私自身も、これほど目立ち、しかも捉えどころのない存在であることに、ただただ驚くばかりだ。」彼はわざとらしく深刻な疑いの表情を浮かべながら部屋を見回し、商人にささやいた。「ご主人は今もお、私たちの話を聞いているのだ。」

男は目を細めて部屋を見回し、声が届くように大きな声で言った。「私は長年、王やその仲間たちと公然と交わってきた。」

「家臣たちよ。」彼は腰に手を当て、壁に向かって言った。「私はジャン＝バティスト・ラバトウ、東方からの輸入品を扱う大商人だ。」自己紹介に返事がなかったので、彼はブラージにささやくように尋ねた。「もしその大商人があなたが言うほど高貴な人物なら、私が知っている名前があるかもしれないな？」彼は身を乗り出した。「彼の肩書きは？」

ブラージは男の肩を軽く叩いた。「ああ、誰もが彼のことを知っている。まもなく君も彼と面会できるだろう。彼の仲間たちと同じように、彼も君との面会を心待ちにしていると思うよ。さあ、ワインでも飲もうか？」ブラージは男を促し、二人は城を出た。

枢機卿は荷車の周りを回り、ワイン樽にかすかに刻まれた紋章を調べた。すると商人が近づいてきた。「なぜ彼の肩書きさえも秘密にして、私にささやくことさえできないのか？」

ブラージは肩をすくめた。「秘密じゃない。主人は多くの名前では呼ばれているが、本当の名前は「死。彼は再び樽に目を向け、「同じ名前の中ではありふれた、しかし高貴な名前だ。どう思う？」と付け加えた。

商人は顔色を青ざめさせ、後ずさりした。「私の状態を考えると、司祭の言葉遣いは非常に不適切だと思います。」

「あなたに悪意はありません」とブラージは答え、木の下にある二つの墓を指さした。「彼らに敬意を欠くつもりもありません。ただ、どうしても目にせざるを得ないものを見ているだけです。本当は、あの木の下には何も見たくないので、墓が見えるのです。兄弟たちがクレシーではなくベタニアで勇敢に倒れ、そして死から蘇ったと知ることができたらどんなに良かったでしょう。しかし、彼らの顔は夢の中でしか見ることはできません。ランスの街を歩く人々の姿は見たくありません。しかし、この街は死に忙殺されています。あなたもその一人です。そして今、私はまた一人を埋葬しなければなりません。」

疲れた足を休めてワインを少し飲みたいところだが、こうして灼熱の太陽の下、荷車にはまだワイン樽が積まれたままで、私が心底軽蔑する主人、つまり死神をもてなしているのだ。」ブラージはため息をつき、荷車に乗り込んだ。

ラバトウは彼について行き、「あなたの兄弟たちは木の下にいますか？」と尋ねた。

「いや。死は木の下にいる どこにでもある。主人は私さえも連れ去った 私も死んだのだ。」ブラージはうめき声を上げ、樽をそっと横に傾けながら指示した。

商人は樽を慎重に動かすように言った。「さあ、逃げられないように優しくやろう。」突然、馬がガクツと揺れ、荷車が動いて商人は樽にぶつかった。樽は荷車の後方へと転がり、ブラージュは慌てて彼の上に乗る、地面に落ちるのを防いだ。彼はワインが落ち着くまで樽を支えた。「優しくしろと言っただろう！牛みたいに歩くな！」彼は哀れな商人の顔を睨みつけ、樽の上に頭を乗せた。そして深呼吸をした。「もしかしたら、一瞬頭がおかしくなったのかもしれない。許してくれ、ジャン＝バティスト。これはただ私の

懸念事項としては、おっしゃる通り、これは特別なワインだということです。

商人は汗を拭き、荷車の後方へと這いながら、「これはフランスで一番美味しいワインです」と言った。ブラージュのそばに立ち止まり、微笑みを浮かべながら、「それに、私はあることを目撃しました。亡くなった司祭が、この特別なワインをひどく渴望しているのです。どうか、彼にご馳走してあげましょうか？」とささやいた。

ブラージュはうなずいた。

二人の男は樽を扱い、荷降ろしのために荷台に一对の踏み板を当てた。

ラバトゥットは板の1枚の傾斜を調整し、咳をこらえた。「疫病にかかっていることは分かっているのに、あなたは私から離れようとしな。どうやら主はあなたを祝福されたようだな？」

ブラージュはじっと立っていた。顎鬚を掻きながら考え込み、指を軽く見つめてから頷いた。「そのようだ。そしてつい先ほど、小さな天使が

「私の手に降りてきて、すべてを話してくれた。」彼は荷車の後ろに寄りかかり、指の関節の擦り傷をいじった。「それから、難しい質問には難しい答えではなく、簡単な答えがあることが明らかになった。難しいように見えるのは、

それは私たちが答えに期待する内容の一部ではありません。つまり、私たちの期待が、質問に対する信頼できる答えとして受け入れられるものを決定づけることが多いのです。私の言っていることがお分かりいただけましたか？

「いえ、違います」と商人は認めた。「ただ単純な質問をただけです。なぜあなたは、周りの人たちのように死なないのですか？」

ブラージュはカートから離れ、両手を差し出して笑いながら、プレゼンテーションのポーズをとった。

「ほらね？君でさえ自分の質問の答えが見えないのは、先が見えないからだ。」あなたが期待する光景です。

ラバトゥットは眉をひそめた。「どうやら君は回りくどい言い方をするのが得意なのか、それとも私に答えたくないのか、あるいは何か問題を抱えているのか、どれかだと思うよ。」

「ああ！」ブラージュは叫び、空中に指を突きつけた。「君は自分で自分の質問に答えているのに、それを答えとして受け入れようとしな。じゃないか。」

商人は鼻を鳴らし、荷車にもたれかかった。「では、どちらが真実なんだ？答えることを拒否するということが？」

「いや、後半の部分は真実だ。つまり、私の体に何か問題があるということだ。」ブラージは唇をすぼめて顔をしかめ、続けて言った。「なぜ私が他の皆のように死なないのかと尋ねた時、あなたは私が死ぬ可能性があると思っていた。あなたは私が生きていたという事実しか見抜けていないのが分かるだろうか？私が言ったように、私は既に死んでいるから死なないのだ。」

彼は笑った。「死者は死ぬことはない 第二の死はないのだ。」

ラバトゥットは荷車から立ち上がった。「冗談じゃない。本当に自分の言っていることを信じているんだな？」

「ほらね？答えは難しくなかったでしょう？ただ、あなたが予想していたものと違っただけよ。」ブラージは顔をしかめ、ウインクした。

商人はブラージを追い払い、額に浮かぶ汗を拭いながら言った。「日も暮れてきた。私は弱ってきたし、君も明らかに酒が必要だ。ワインの樽を運ばなければならないし、きちんとした埋葬の手配もしなければならない。さあ、行こうか？」

二人は慎重に樽を台所に運び込み、部屋の一番奥の隅に立てて置いた。商人は息を切らしながら、樽に寄りかかった。

ブラージは壁にもたれかかり、息を整えた。「こういう時に限って、宮廷の従者はどこにいるんだ？」

商人は彼を見上げた。「どの従者ですか？」

ブラージは首を振り、肩をさすった。「スクワイアーズがいよいよとまいと、我々はそれを移動させた。必要なんだ。」

「私たち？君たちに必要なんだ。」

ブラージは壁から離れ、かがみ込み、ズボンの裾をまくり上げ、膝の横にあると感じたワイン樽の破片を取り除いた。彼は傷口をいじりながら言った。「いや、友よ。死の最も苦痛な瞬間は最後の時だ。その時が来たら、お前はこのワインを乞うことになるだろう。」

商人は顔をしかめ、背筋を伸ばして、露出した脚を調べた。その脚の皮膚は厚く、凹凸があり、ひどく変色していた。

ブラージは膝から木片を抜き、親指を舐め、わずかに滲んだ血を拭った。

彼は立ち上がり、商人の嫌悪感に満ちた表情に気づいた。「ほんの小さな破片だ。私は生き延びるだろう」ブラージは微笑んだ。

「確かに、あなたはそうなるでしょう」と商人は答えた。「ほとんどの人よりもずっと。」

ブラージの笑顔が消えた。「どういう意味ですか？」

「つまり、あなたは私たちより長生きするという点で、幸運か呪いかのどちらかのようですね。」

商人は自分の足を指さした。「他の男なら死んでいただろう火傷を見せてくれ。」

そしてあなたは今、私と一緒にいる 疫病がすぐそばにあるのに 死にそうになるよりも、木の破片が刺さったことの方がよほど気になるのか。」商人はうなずき、顔に疑念を浮かべた。「どうやらあなたは、死すべき運命以上の何かを持っているようだ。あなたは一体何者だ？」

ブラージはニヤリと笑って眉を上げ、謎めいたふりをした。「もしかしたら私は天使に祝福されているのかも？」彼は商人の肩を軽く叩いて安心させ、

階段を上って彼を案内しながら、「私たち全員にとって何が最善かは主のみぞ知る。さあ、あなたを落ち着かせましょう。快適に過ごせるでしょう。階下の状態とは違って、

「二階の寝室はきちんと整頓されていて清潔だ」と彼はくすくす笑った。「全体的に見れば、ここは天国と地獄が一つになったような場所かもしれない」商人は階段で立ち止まって彼を見ようとしたが、ブラージは押し入って上へと進んだ。「心配することはない。約束通り、私が君の面倒を見る。そして、君の埋葬も、神に仕えるにふさわしい人物の埋葬と同じようにきちんと行う。今は休むべきだ。そして今晚は、美味しいワインと楽しい仲間たちと過ごすことにしよう。」

ブラージが瀕死の客を落ち着かせ、アルゼーの二階の寝室で歓待している間に、商人は眠りについた。彼は馬車を厩舎のそばに停め、新しく手に入れた馬の世話をした。彼は馬に餌と水を与え、ついには逃げ出した野性の黒馬が入っていた最後の馬房に馬を閉じ込めた。数時間が経過し、彼はランタンの明かりと星空の下、城に戻った。彼は油ランプに火を灯し、樽を叩き、二杯のゴブレットと二頭の馬さえも酔わせるほどの量のワインを木製の洗面器に入れて、眠っている客を起こした。

ブラージは洗面器とワイングラスをベッドサイドテーブルの上に滑らせた。「午後はほとんど寝ていたようです。気分はどうですか？」

男はベッドの端に腰を下ろした。「まるで踏みつけられたかのように

「悪魔そのものだ」と彼はうめいた。額から汗が流れ落ちた。「夢の中で、私たちは墓穴を掘っていたんだ。でも、土がなくなってしまった。土を探していたんだ。ああ、神様。」ブラージは、彼がまだ土を探しているかのように部屋を見回すのを見ていた。それから彼は洗面器とゴブレットを見つけた。「ワインを注いだのか？」

「ええ、どうぞ。」ブラージはもてなし役を務め、空になったゴブレットを二つ取り出し、一つを客に差し出した。

「もう少ししたら」男は喉をさすり、ごくりと唾を飲み込んだ。顔は苦痛に歪んだ。ブラージは二つのゴブレットを洗面器の横に戻し、窓辺に近づいた。両手を後ろで組み、正面の道路をじっと見つめた。遠くの松明がいくつも列をなして、暗闇の中をゆっくりと漂っていた。まるでランスからの大脱出が続いていることを示す、怠惰な炎の亡霊の列のようだった。

「あなたの名前はラバトウトでしたか？」とブラージは尋ねた。

男は咳払いをして喉を整えた。「ジャン・ラバトウだ。」

「そうだったような気がする」ブラージはくると振り返り、商人のブーツをじっと見つめた。「マルセイユ出身だとおっしゃっていましたよね？」

「マルセイユですね。」

「ところで、このワインはどうやって手に入れたんですか？」ブラージは洗面器の方を指差しながら尋ねた。

「

ええ、私はアヴィニオン出身ですが、元々はマルセイユ出身です。疫病が最初に流行した時にマルセイユを離れました。

「ああ！」ブラージュは指を鳴らした。「君はジャン＝バティスト・ラバトウだ。アヴィニオンの商人で、鍛冶屋の向かい、教皇庁墓地へと続く小道沿いに店を構えていた男だろう？」

「あ、ああ。どうやって」

ニヤリと笑いながら、ブラージュはベッドに近づき、まるで謎を解き明かすかのように顎鬚を撫でた。「そして、あなたの忠実な荷車配達隊は定期的にマルセイユ港へ行き、そこでジェノヴァの商船と密かにワインの樽を交換していました。

カッファからジェノヴァへ輸入される商品との交換。

「以前お会いしたことがありますか？」と商人は尋ねた。

「ただし、ただのワインではありませんよ。」ブラージュは彼の質問を無視し、指をさしながら言った。「最高級の果実から生まれた、まさに天上の発酵です。これらの樽は、教皇陛下の質素な住まい、アヴィニオンの教皇宮殿にある大貯蔵庫から直接運ばれてきたものです。」ブラージュはくすくす笑った。

「どうしてそんなことを知っているんだ？」商人はベッドの上で身じろぎをし、明らかに不安を募らせていた。

しかし枢機卿は演説を続け、さらにこう締めくくった。「ジェノヴァの人々が船を比較した際に、なぜ多くの相違点に気づけなかったのか不思議です。」彼らが荷揚げしたものの記録も残されている。それに、宮殿の在庫係がこれほど多くのワイン樽の紛失に気づけなかったのも不思議だ」とブラージュは満足げな笑みを浮かべた。「もちろん、船の積荷の一部も、教皇の樽の一部も、当初は在庫として記録されていなかったのかもしれないがね。」

「お前は聖職者ではない。一体何者だ？」商人は彼を睨みつけた。

「実は私は枢機卿なんです。」

「そして俺は空飛ぶ駿馬だ」と男は吐き捨てた。

ブラージュは笑った。「樽を動かす前に、その樽に印がついているのに気づいたんだ。いつもワイン樽の側面に刻んで、君の配達人が取りに来るように取っただけの印と同じだ。そのシーズンで一番良い樽にだけ印をつけていたんだよ。」彼はうなずいた。「どうやら、しばらくの間は、私たちは信頼できるパートナーだったようだ。お互いにとって利益のある取引だっただろう？長年の時を経て、こうしてようやく顔を合わせることができたのは、ある意味幸運かもしれないが、このような深刻な状況下で会うことになったのは残念だ。」

「枢機卿閣下？ジャン＝フランソワ・ブラージュ枢機卿ですか？」男は信じられないといった様子で尋ねた。

ブラージュは両手を手のひらを外側に向けて上げた。「私が彼です。かつてあなたの忠実なワイン供給者でした。再びあなたのために尽力いたします。」

商人はくすくす笑った。「なるほど、あなたは私の告白の一部を知っているようですね」

「私が話す前からそう思っていたんだ。」彼は首を振った。「それに、私が彼に渡した輸入品をこの枢機卿がどうしていたのか、よく不思議に思っていたよ。」

ブラージは近くの花瓶から長い茎の紙の花を抜き取り、眉を上げて彼に答えた。「ご存じかもしれませんが、枢機卿団は様々な考えを持つ人々の集まりです。時には、贈り物など、他者の忠実な支持を得なければなりません。」

「商人よ、私の言いたいことはお分かりでしょう」ブラージは花をくるくると回し、ニヤリと笑った。そして彼にウインクした。

商人はくすくす笑った。「お前もこの件に関わっているのだから、私と大して変わらないな。」

「そして私はそんなことを主張したことは一度もありません。しかし、あの時代は過ぎ去り、私たちの行いは記録に残されることなくずっと前に埋もれてしまいました。そして今日でも、栄光ある聖座も、威厳あるジェノヴァの貴族も、説明のつかないことには気づきません。どちらも過剰なものに慣れているのです。」

「あらゆるものについて。」枢機卿は弱々しく微笑み、指で花びらを紙のように見つめた。「偉大な権力者の座には、このような無関心な盲目さがつきものなのではないか？」

ブラージは、ぼろぼろになった花の匂いを嗅ぎ、花びらから埃を吹き飛ばした。「しかし、どうやら我々二人は同じような不幸に見舞われたようだ。君はもはや私が覚えていた裕福な商人ではなく、私も君が記憶していた聡明な枢機卿ではない。」彼は花を床に投げ捨て、両手を後ろで組んだ。踵を軸に体を揺らした。「ああ、だが、君が密輸したジェノヴァからの輸入品の一つが今や陛下の宮殿にあることを知れば、少しは面白いと思うかもしれない。卵を調理するための、かなり奇妙な三脚式の器具だ。中には青いが描かれた油ランプが二つ入っていた。」

「私はそのような装置を覚えています。陛下ご自身が命名された卵窓と呼ばれるもので、前回のマルセイユへの旅で3つ入手しました。私の使者はそれらが非常に価値のあるものだと考え、取引で受け入れたのです。商人は枕をヘッドボードに積み重ね、体をまっすぐに伸ばしました。「それで、それは国王への贈り物だったのですか？」

ブラージはサイドテーブルに近づいた。

「厳密にはそうではない。どちらかという、交流の一環だ。」

"何のために？"

ブラージは笑って言った。「まあ、どうしても知りたいなら教えてあげよう。軍隊を確保するためさ。」

「軍隊だと？」男は彼をじっと見つめた。「私は燃えるような赤い駿馬だ。だが、全てを話してくれ。」

「もし私がすべてを話したら、あなたはきっと信じてくれないでしょう。」ブラージは両方のゴブレットを洗面器に浸しながら言った。「さあ、そろそろワインをいただきますでしょうか？」

彼は商人に歓待の意を示し、商人は杯を受け取って「ああ、熱を追い払ってくれるかもしれない。もし神様が許してくださるなら、死さえも追い払ってくれるだろう」と言った。彼はブラージに乾杯し、杯の半分を一気に飲み干した。

「うわっ！」商人はうなり声を上げ、ワインが顎鬚を伝って流れ落ちた。ブラージは自分のゴブレットの匂いを嗅ぎ、そこから一口飲んだ。「苦いな」ブラージは唇を鳴らしながら不満を漏らした。「ワインはどれくらいの間、日中の暑さにさらされていたんだ？」

「アヴィニオン以来。アヴィニオンに疫病が到来したという知らせを聞いて、私は急いで荷車に荷物を積み込むのを忘れた。樽に蓋をするのを忘れたんだ。」男は袖で唇を拭った。

「太陽のせいで枯れてしまったんだ」とブラージは結論づけた。

商人は残りの酒杯を一気に飲み干し、テーブルに身を乗り出して自分の杯に酒を注ぎ足した。「まあ、死にゆく者は味わうために飲むものではない」と彼は言い、枕にもたれかかりながら再び枢機卿に乾杯した。

ブラージはゴブレットを持ち上げ、硬い表情で最後のワインを飲み干した。「死者もそうするさ」と彼はうめいた。そして彼もまた、ゴブレットを洗面器に浸してワインを注ぎ足した。

「まさか本当に死んだつもりじゃないだろうな？」商人はくすくす笑いながら彼に尋ねた。彼が顔を上げると、かなり厳しい視線が向けられていた。実に真剣な表情だった。彼の笑みが消え、その瞬間、ラバトゥットは、今自分の上に立っている司祭の中に、すでに蒔かれた狂気の種を見たのかもしれない。商人は視線をそらし、黒い窓を見つめた。それから眉を上げてつぶやいた。「まあ、最後にはあなたと同じように死にたいと願っていますよ。それは認めます。」彼は司祭の方を向いて乾杯し、もう一杯飲み干した。それからゴブレットをワインボウルに戻した。彼はうめき声を上げた。「容態が悪化している。」彼は汗を拭い、枕に深く身を沈め、両手でゴブレットを握りしめ、まるで寝物語を待ちわびる子供のように微笑んだ。「それで、あなたが確保したこの軍隊のこと、そして私が信じがたいことを話してください。ああ、それから、もしよろしければ、あなたの足の傷についても話してください。」

ブラージは振り返って部屋の中を歩き回り、ベッドの足元を通り過ぎ、紙の花を踏みつけた。しかし、彼の目は床を通して過去を覗き込んでいた。「まあ、私は今となっては、そんなことはどうでもいい。死人が死にゆく人に告白できないほど神聖な秘密ではないのだから。」彼は深く考え込みながら、少し歩き回った。

商人は「さあ、どうぞ！ さもないと、この瀕死の商人は、死んだ枢機卿が告白する前に死んでしまうかもしれないぞ！」と迫った。ブラージはくると振り返った。二人は互いに顔を見合わせ、くすくす笑った。

「よろしい」とブラージは言った。「それはアヴィニオンで始まった。シャトー・ルージュで、私は実に驚くべき光景に遭遇したのだ。」ブラージはゴブレットを手に部屋の中を歩き回り、商人から目を離さずに、亡くなった兄の亡霊との親密な会話、そして枢機卿仲間を殺害することに躊躇した理由などを語った。聖座から驚くべき秘密を引き出すこと 地獄への入り口の仕組みを記述した厳重に守られたページを盗むための巧妙な欺瞞 彼の見事な

無防備な教皇に対する陰謀を画策し、その結果、国王の軍隊は、要塞化された修道院を前例のないほど包囲し、犠牲者はほとんど出なかった。彼が解き放った悪魔たちがイングランドの全軍を壊滅させること、そして、向こう見ずで非難されるべき大尉の軽率な行動によって彼の計画が最終的に崩壊すること。時折、商人が口を開こうとしたが、ブラージは枢機卿会議の議場をしばしば支配する卓越した演説家として振る舞っていた時と同じように、情熱的で絶え間ない演説で商人の注意を引きつけた。そしてその間ずっと、ブラージは二人が洗面器の中のワインをすべて飲み干すまで、二人の杯にワインを注ぎ続けた。

ラバトゥは、自分が今感じている懸念の根源を考察し、その原因を突き止めた。ほんのわずかではあったが、それでも彼にははっきりと分かった。枢機卿の視線から、新たな、そして不自然な光が放たれていた。最初は気づかなかった、奇妙な輝きだった。ブラージはまるで二つの異なる方向から彼を見つめているようだった。片方の目は彼の肩越しに覗き込み、もう片方の目は彼の魂の奥底まで見透かしているようだった。彼は、白い目が自分の内側を、そして同時にあらゆる場所を見つめているように感じた。

ブラージは空の洗面器を持って部屋を出て行ったが、すぐに装飾の施された三本足のワインが満ちた水差しを持って戻ってきた。それをサイドテーブルの上に置いた途端、商人は慌てて身を引いて警戒するように彼から離れた。ブラージは気づかないふりをした。病人の杯にワインを注ぎ足し、よく調べることに特に熱心で、まるでワインが正確に計量された薬であるかのように注意深く作業していた。「もう少し飲めば、あなたの病状のより顕著な兆候が和らぐでしょう」と、ブラージは熟練した医者のような自信をもって言った。彼は満杯のゴブレットを、寝たきりの患者に優しく微笑みながら差し出した。しかし、商人はただ彼を見つめるだけだった。「杯を取って」とブラージは強く言った。「飲んでください。苦しみを紛らわせてください」。しかし、商人の目は、まるで急いで逃げ出そうとしているかのように、部屋の中をきょろきょろと見回した。燭台の薄暗い光の中で、ブラージは男の額を伝う汗の粒を見た。「病気で熱が出ていますね。」

落ち着いて、私の言うことを聞きなさい。まだコップをしっかりと持てるだけの体力があるうちに、飲んでおくようにと強く勧める。」ブラージはベッドにさらに身を乗り出した。「飲め！」と彼は怒鳴り、客の膝の上に広がる尿の輪を無視した。

商人が彼の手に持っていたゴブレットを叩き落とすと、ワインが飛び散った。「近づくな！お前みたいな奴とはもう酒を飲まない！」

「お望み通りに」とブラージは落ち着いた口調で答え、姿勢を正して服についたワインの飛沫を拭き取った。彼は背を向け、自分のグラスにワインを注ぎ足すことに集中した。

「残念ながら、私は自分のような者と飲み続けなければならない。そして間もなく、君の衰弱していく病状の悪化による苦痛が、君にも同じことを懇願させるだろう。」

カップを手に、ブラージは自ら定めた場所に戻り、窓際に立って、男が落ち着きを取り戻すのに十分な空間を与えた。ブラージはカップをちびちびと飲みながら、一見不敬な口調で時間をつぶし、異常な内省と不吉な予言を延々と繰り返した。それは、聖職者の中でも最も信心深い者でさえも、ましてや枢機卿にはふさわしくない行為だった。

ブラージは窓ガラスに顔を押し付け、夜の闇を通して鋭く見えるふりをして、疫病に感染した通行人の絶え間ない流れをじっと見つめながら、ただつぶやくように続けた。「見てみろ、まるで死体の列のように歩いている。奴らはもう死んでいるんだ、全員だ。絶望的な状況で、いかにももがいているか見てみろ。ただ懐かしい思い出と、いつまでも続く白昼夢に駆り立てられているだけだ。」彼は深くため息をつき、思い出を噛みしめながら、先見の明と後知恵が組み合わさった、かなり珍しいつながりを口にした。「夜明けとともに、道端で白昼夢にふけている奴らをさらに多く見つけるだろう。満ち足りた笑みを浮かべ、裸の姿で、目にハエがたかっている。もし奴らが自分自身についての真実を知っていたら、生きているふりをやめて、静かに倒れるだろう。見てみろ、

彼らは歩き回り、生きているふりをしている。死を迎えて初めて、彼らは自らの境遇の全てを理解するだろう。死がその世界の構造そのものに織り込まれている世界で生き延びようとしたことが、いかに愚かなことだったかを。結局、この世の何物も神聖なものとしては残らない。もし全てがハエのような存在に奪われてしまうなら、希望や夢よりも大きな善など、一体何があり得るだろうか？

「あなたは司祭ではないと思う」と商人はぶつぶつ言った。「一体何者だ？」

「私は誰だ？」ブラージはくすくす笑った。「どうしてそうなったのかを話せば、私が誰だか分かるだろう。すべてはごく単純なことから始まった。」しばらく沈黙した後、彼は咳払いをして話し始めた。「私がまだ少年だった頃、大きな木の幹を元気いっぱい蟻の列が登っているのを見た。高い枝はつい最近落雷で燃え上がっていた。蟻の列が木を登るにつれて、蟻は燃えて地面に落ちた。私は蟻を樹皮から払い落としたが、さらに多くの蟻が同じ道を辿った。私は蟻の進路に唾を吐きかけたが、蟻は唾を避けて上へ登り続けた。私は蟻を何匹か叩き潰し、他の蟻がすぐに危険を察知して引き返すことを期待したが、蟻は死骸の周りを這い回り、火の中へと登り続けた。」ブラージは首を振り、くすくす笑った。「少年らしい、実に愚かな使命でアリたちを炎から救おうとした時、落ちてきた枝が私の足を折って、私は命を落としかけた。その瞬間は、

私の魂の奥底まで、私の運命の軌跡さえも変えてしまうほどに 騎士から、司教としての私へと。」彼は指を鳴らした。「蟻の群れから枢機卿へ、今やあなたは私が何者であるかを知っている。」ブラージは窓から背を向け、商人の方を向き、謙虚な威厳のジェスチャーで両手を広げて自分を差し出そうとした。しかし、酔いのあまり、彼はサイドテーブルにつまずき、

花瓶を床に叩きつけて壊した。彼はゴブレットを落として後ろに倒れ、ひびが入った。彼は窓ガラスに手をつけてから、窓枠に手をつけて体を支えた。視線は足元に釘付けになっていた。そこには、壊れた花瓶の破片が、ぼろぼろになった紙の花の中に散らばっていた。

「アリが死んでいく…うーん…ハエが遊んでいる…うーん。」商人はベッドの端に腰掛け、ブーツを履きながら、嘲笑いながらうめき声をあげた。

「靴なんて必要ないよ」とブラージは言いながら、よろめきながら彼の方へ歩み寄った。「休まなくちゃ。何をしているんだ？」

「じっとしてろ！」商人は彼に指を突きつけ、「距離を保て！」と怒鳴った。

ブラージは歩みを止めた。「なぜ着替えなければならないのですか？」

男は服を整えた。汗で濡れた髪の毛の下から、非難の眼差しをブラージに向けながら、彼は唸るように言った。「間違っていることを正すために。私はこの罪深い屋敷から、そして自らを尊厳ある高名なブラージ枢機卿と称する、この自称冒瀆的な精神から、立ち去らなければならない！」

ブラージは、小さな青い花が描かれた光沢のある表面と、たっぷりと注がれた未開封のワインが入った、精巧に彩られた磁器のピッチャーをじっと見つめた。そして、「我々の合意は、一体どうなるのだろうか？」と尋ねた。

男は悪化する症状の痛みをしかめた。彼は髪を後ろに払い、枢機卿をじっと見つめて言った。「私の商品も、荷車も、馬も、すべてあなたにお譲りします。私は自分の足さえあれば、どこへでも行けます。」

ブラージは今やその男をまるで他人、つい最近出会った商人とは全く別人のように感じていた。男は何度も殴られたかのように痣だらけで腫れ上がっており、ろうそくの光の角度によって、その異様な顔立ちには均一な汗の光沢が浮かび上がっていた。頭は猿のようで、顔はひどく窪んでいた。

「見てみろよ」とブラージは嫌悪感を露わにしながらか叫んだ。「お前は話している間に死んでいくんだ！」他に避難場所はない。休養しなさい！

商人はうなずき、よろめきながらドアに向かった。「ご安心ください。平和のうちに、そして悪の手を借りることなく。」彼は部屋を出て、壁の石に体を預けながら、慎重に開け放たれた階段を下りていった。

ブラージは彼の後をついて行き、寝床につくよう促した。しかし商人はブラージの懇願を無視し、一步ごとに彼を嘲りながら歩き続けた。「この家の主人は死神だ！私は生きているが、同時に死んでいる！私は聖下と教会に反逆している！私は枢機卿、修道院長、修道士を殺した者だ！私は地獄の門を開けたのだ！さあ、奴らの目にたかるハエと遊ぼう！」

「そんなことは言ってない！」ブラージは答えた。顎を胸に押し付け、ぼんやりとした記憶をたどってから、信じられないといった様子で尋ねた。「私がそんなことを言っただろうか？」彼は階段で立ち止まり、満杯のゴブレットを傍らにぶら下げ、不器用にワインを服にこぼした。「私たちが  
「ハエと遊ぶかもしれないな？」彼は重い頭を壁にもたせかけ、鼻を鳴らしてくすくす笑った。  
「ワインのせいで理性を失ってしまったのかもしれませんが。どうかお許しください。言葉遣いには気をつけなければなりません。」そう言って彼は、ひるむことなく進み続ける商人の後を追いかけて腕をつかんだ。「だめだ！もう何も言わない。さあ、部屋に戻らなければならない！」

商人はブラージの手を振りほどき、階段を降りると、台所を駆け抜け、石造りの暖炉に寄りかかって体を支えた。彼は自分の所在を探し、部屋の大部分を覆うように高く積み上げられた自分の持ち物を見つけた。  
向かい側では、燃えるオイルランプがワイン樽の上に置かれ、その揺らめく炎が雑然とした空間を不気味なほどに浮かび上がらせていた。彼は床に浮かぶ影を見つめながら、間接的な非難でブラージを叱責した。  
「ほとんどの男が死ぬような怪我なのに、お前の足はもう治っているのか。」  
そんな怪我。どうしてそんなことがあり得るのか、まさか ああ、そうだ 天があなたに幸運を祈ったからではないか！

男はよろめきながら床に倒れ込み、自ら作り上げた商品でできた迷路のような影の中を、慌ただしく這いずり回った。闇が彼を飲み込み、残されたのは「聖デニスよ、私の道を覆ってくれ！私を覆ってくれ！」と叫ぶ声だけだった。  
ブラージは商人の声のする方へ叫びました。「彼は一体誰から、あるいは何からあなたを守ろうとしているのですか？しっかりしてください！疫病であなたは重篤な状態です。」ブラージはよろめきながらワインをこぼしながら、彼は言った。「戻ってこい、と言っているんだ！鍋やフライパンがガチャガチャと音を立て、ガラスや陶器が敷石にぶつかって砕け散る中、影のような山々が対照的な音色のクレッシェンドで崩れ落ちた。「そこにいるのが見えるぞ！しっかりしろ！」  
君は気が狂ったんだ！  
男は暗い隅から飛び出し、シャベルを振り回した。その刃はブラージの顔からほんの数度離れたところをかすめた。その刃のぼんやりとした光にブラージは思わず顔を上げた。  
商人は両手と聖杯を司祭の顔に突きつけ、決意を示した。「今晚、お前の墓を掘ってやろうか？」

「結構です」とブラージは譲歩して答えた。「ご希望通り、あなたの分もご用意しましょうか？」

「そんな必要はない！私から離れろ！」と商人は吐き捨てた。  
ブラージは瞬きをして数歩後ずさりし、商人の唾を足元から拭き取った。  
彼の目。「お望み通りにいたします、ラバトウツト司教様。あなたに悪意はありません。」  
「お前は司祭のふりをして悪魔と結託しているのだ」と商人は唸り、刃をブラージに突きつけ、散らばった山を突き破ってさらに後ずさりさせた。

床に物が散乱している。

ブラージは雑多なものにつまずきながらも、なんとかゴブレットをこぼさずに済んだ。商人は慌てて角から逃げ出し、瓦礫の中を大股で駆け抜けながら、文句を言いつつ急いで城の裏口へと向かった。「全部持って行け！こぼれた香辛料も、壊れたスプーンも、苦いワインの一滴も！だが、このささやかな道具だけは俺のものだ！」と、彼はシャベルを高く振り上げながら唸った。一瞬振り返った彼の狂気に満ちた白目は、ランプの光さえも凌駕するほど輝いていた。

「ああ、確かに！」ブラージは激怒した商人に同意した。「それはあなたのものです。おっしゃるとおりです！どうぞお持ちください。」

男は振り返り、その場で凍りついた。二人は互いにじっと見つめ合い、夏の夕暮れの単調なコオロギの鳴き声、そして家の中に漂う息苦しい暑さと、いつまでも残る悪臭を改めて感じ取った。

ブラージは深呼吸をして沈黙を破った。「それで、そのシャベルで何をするつもりなんだ？」彼はワインを一口飲み、道具の刃と

病気によって引き起こされた狂気に満ちた男の鋭い視線。

商人はついに不安げな笑みを浮かべた。「いいえ、司教様。あなたは神の人ではありません。溺れている犬の方が、あなたが用意した墓の中の人間よりも天国への希望を見いだせるでしょう。私はあなたを最悪の悪魔と見ています。敬虔さを装いながら、その二枚舌を隠し、永遠に悪事を働くことを止められないのです。」

「私は私が言うとおりの人物です」とブラージは述べた。「私はあなたの以前の取引を手伝った枢機卿そのものです。」彼は木樽を指さした。「その樽は、大地下貯蔵庫から来たものです。」

「教皇宮殿の唯一の管理人を務めていたのです。」そう言って彼は、まるで乾杯するかのようになり、商人のほうへゴブレットを傾けた。「苦くても、このブドウは味でわかる。ただのブドウではない。それに、私は神とフランスに仕える者だと自覚している。たとえあなたが言うように、疫病に苦しむ者や溺れる犬のような者には、私がどれほど不吉に見えようとも。そうは言っても、私の申し出は変わらない。熟練した司祭が期待するであろうあらゆる敬意、儀式、祈りをもって、あなたを埋葬しよう。」

商人は散らばった商品を見回し、まるで初めて聞いたかのように申し出を熟考しているようだった。彼は再びブラージに目を向け、シャベルを差し出した。

脅迫的に。「それで？」

影を破って床を照らすかすかな光の筋を通して、ブラージは散乱した食料の中に小さな馬の置物があった。陶器の置物の破片が、踏みつけられて敷石の上に散らばっていた。小さな青白い馬の頭が、商人のブーツのかかとの横にあった。商人と同じように、ブラージも振り返って同じ雑然とした周囲を調べ、すぐに理解したことを頭の中でじっくりと考えながら、より大きな全体像に意識を向け直したようだった。

個人的で、一見謎めいた、循環的で風刺的な言及の状態。実に意外な展開だ。

一連の出来事について、彼は、今や壊れてしまった陶器のおもちゃは、以前甥に贈ったものだったのではないかと考えていた。

それは彼がジェノヴァ船からの密輸品を秘密裏に取引して入手したもので、おそらく目の前にいる商人から譲り受けたものだろう。同様に、今や苦味を帯びたワインの樽も、間違いなく商人が過去に彼と間接的に取引していた際に得たものだ。当時ブラージは、教皇宮殿の地下貯蔵庫から樽を定期的に密輸し、その見返りとして珍しい輸入品を入手していた。そして、その珍しい輸入品とは、まさに今回壊れた極東の磁器の置物のようなものだった。

「それで？ じゃあ、何なんだ？ 全部言え！」商人は目を細めて叫び、まるでブラージに、ファウスト的な策略が悪魔が引き出した取引の、わざと目立たないように隠された契約の詳細を明かせようと迫っているかのようだった。

ブラージは、その男の尋問者のような大げさな態度に対し、疲れたような笑みを浮かべ、最終的には無表情な口調でこう答えた。「そして、私はそれらの言葉をあなたのために使おう。」

結局のところ、私が別の言葉で祈らなければ、どうやって天国を見つけることができるのでしょうか？

「悪魔の言葉と邪悪な言葉で？ ああ、やはりそうだったか」と商人は叫び、枢機卿に向かってシャベルを突き出した。しかしブラージは微動だにせず、壊れた馬をぼんやりと見つめ、かつて天使よりも速く飛んだ若者の思い出に浸っていた。そして、その勢いがあまりにも強かったため、優しい風がそれに気づき、彼を吹き飛ばしたのかもしれない。

少年はそれら全てを知っていた。それは、悪意に満ちた不敬な「ペスト」によって引き裂かれた世界だった。

ブラージは唇を噛み締め、無表情に頷いた。「残念ながら、今ここの屋敷とその敷地から立ち去っていただくようお願い申し上げます。手に持っている道具と、持ち運べるものは何でもお持ちいただいて構いませんが、馬と聖下のワイン樽は聖座の十分の一税および動産として残させていただきます。」

「馬などいらない！ それに、お前はワインに溺れてしまうかもしれないぞ。お前の卑劣で許しがたい惨めな姿は勘弁してくれ」と男は唸った。

ブラージは息を荒くして眉を上げた。「では、どうぞご自由に。きっと道は見つかるでしょう。」

「確かにそうしよう」商人はぶつぶつ言いながらシャベルを下ろした。彼はドアの方へ後ずさりし、背後からドアを開けた。涼しい風が部屋を包み込み、ほのかな雨の香りが漂った。遠くでコオロギが鳴いていた。「墓を掘らなきゃいけないんだ、

「手段は持っている。そして、私を追おうとするな。」夜空に閃光が走り、ブラージには彼の姿はシルエットとしてしか見えなかった。

ブラージは商人を安心させた。「心配しないでください、ラバトゥット司教様。私は覚悟を決めて

「ここに留まり、自分の抱える問題に飲み込まれていく。」彼はゴブレットを傾け、その空っぽさを確かめた。「いっそ、その中に溺れてしまいたい。」

彼は、商人が汗でびしょり濡れた髪を顔から払い除け、肩に担いだシャベルをまたいで夜の闇の中へ出て行くのを見送った。ブラージュは用心深く彼を追ってドアまで行き、それから気だるそうに玄関の枠にもたれかかった。彼はゴブレットをくるくると回し、去っていく客に向かって気のない乾杯をし、飲むと顔をしかめた。

最後の一口まで、腐ったワインを飲み干した。雷鳴が轟く中、彼はため息をついた。

どうやら商人は彼の仕草に気づいたようで、ブラージュに向かって叫び返した。「ああ！こんにちは、悪魔！」ブラージュは城に戻り、裏口を施錠した。彼の頭の中には、満杯の洗面器と空っぽのベッドのことしかなく、その両方を永遠の快樂のために使うつもりだった。

城の外では、死にゆく男が背の高い雑草の中をよろめきながら進み、蜘蛛の巣の切れた糸やぼろぼろの繭、とげのあるイバラを払い除けながら、神、イエス、聖クリストファー、そして彼の祈りを聞き届けてくれるかもしれない他のすべての聖なる殉教者に祈りを捧げていた。道に背を向け、屋敷の裏庭に目を向け、自らに課した使命を帯びて、手つかずの森の黒い地平線に向かってよろめきながら進んでいった。彼にとって、死はもはや自分と神以外の誰とも分かち合うべきではない、個人的な問題となっていた。残念なことに、彼の行く手を照らすのは稲妻だけだった。かつての星明かりは、迫りくる嵐の雲の壁に隠れて、かすかに光っていた。そして、不平を言う空の下、天からの閃光が、カフタッセルと金属製の留め具が付いた、精巧に作られた二重縫いの緑色のブーツを履いた、高く足取りのブーツを露わにした。そのブーツは、暗い雑草の海のように広がっていた。

最終的には水没した。

それは、ブラージュ枢機卿にとって、かつては著名な商人であり、フランスが知る限り最高の極東からの輸入品と厳選されたワインの名仲間であったジャン＝バティスト・ラバトゥと、おそらく長らく待ち望まれていた直接の対話を楽しむことができた最初で最後の機会だった。

～\*～

死と破壊だけが全てだった。黒焦げの疫病はフランスのあらゆる都市や町に広がり、その破壊的で容赦ない存在によって人々の共同体の心を麻痺させた。貧しい農民たちは暴徒化し、村全体を焼き払いながら、フランスではどんな悪も勝利しないという、ありふれた馬鹿げた考えを抱いていた。つまり、フランスのあらゆる都市に火を放つほど大胆であれば、悪はフランスに勝利しないという考えだ。しかし、疫病は野火のように暴徒の中に広がり、彼らを黒焦げにした。

彼らが焼き払った建物の灰。

大疫病の仕組みと起源を解明しようと必死だったフィリップ王は、1348年10月、パリ大学の著名な教授陣を招集した。

直ちに、様々な分野の専門家からなる選出された評議会が招集され、儀式的な秘密の下で審議を行い、その結果を「パリ評議会論文」と呼ばれる文書にまとめてフィリップに提出した。この共同作業では、惑星の配列、地震によって放出される地下の蒸気、腐敗した沼地から湿った風に乗って運ばれる有毒粒子など、疫病のいくつかの可能性のある原因が挙げられた。しかしながら、この解説は単なる憶測の集まりであり、原因や治療法を明らかにするのにほとんど役立たなかった。そして、悪魔は文書の詳細には含まれていなかったものの 悪は原因の典拠から外れていたにもかかわらず この臨床的な解説は、一見突如として謎めいたこの絶え間なく人々を蝕む忌まわしい存在に対処しようとする、それ以外は立派な試みであった。それまで、約1000万人のヨーロッパ人は死にあまりにも夢中になっており、原因など気にしていなかった。結局のところ、死者はほとんどの場合、死んだままなのだから。

黒死病は猛烈な地獄の業火であり、ヨーロッパ大陸を焼き尽くし、人類を焼き焦がした。人類は、まさに燃え盛る炎の嵐の中の若木に過ぎなかった。燃え盛る腕のように、悪魔の病の進撃線は内陸部へと広がり、北と西へと伸びて汚染されていない地域を奪い取り、大陸全体を締め付けていった。国は次々と、そして端から端まで、まるで燃え盛る地獄のように渦巻いていった。

スペインでは疫病が爆発的に流行し、都市の大部分が、土のない墓地というかなり斬新な概念にさらされた。容赦ない夏の干ばつで、疫病は町々を襲い、うだるような暑さの中で、住民は季節の暑さで汗をかいているのか、それとも突然の熱で汗をかいているのか区別がつかなかった。住民のほとんどは日中の暑さのせいにしていたかもしれないが、半数は脇の下にできた新しい黒い芽を単なる汗や蒸気として簡単に無視することはできなかった。実際、疫病は迅速かつ無差別な処刑人であり、健康な人は寝床についたが、日の出までには硬直して横たわっていた。そして、スペインの長引く干ばつとうだるような暑さの中で、冷たくきれいな水は液体銀だった。残念なことに、共同井戸の多くは腐敗した隣人の遺体で汚染されていた。ユダヤ人が水を汚したと非難する者もいれば、イスラム教徒を非難する者もいた。しかし奇妙なことに、キリスト教世界の民衆にこのような終末的な出来事が降りかかったにもかかわらず、悪魔の仕業だと非難した者はほんの一握りだった。それでも、家から逃げる体力もなく、井戸の水を一口でも飲む勇気のある高齢の住民にとって、選択は彼らが切望する水と同じくらい明白だった 病に身を任せるか、脱水症状に耐えるか。それでもなお、絶望と窮余の策の中で、彼らは水を飲んだ。

彼らは杯から聖水を汲み、深く祈りを捧げ、街の土のない墓地で隣人たちと共に眠った。

一方、イングランドの町や村もスペインの町や村と同様に崩壊した。厳格な港湾規制が敷かれていたにもかかわらず、疫病は夜陰に紛れて忍び寄ってきた。水路を伝って、ロンドンとブリストルの港をこっそり通り過ぎた。上陸すると、伝染病は爆発的に広がった。医師、聖職者、政治家は次々と墓に飛び込み、潰瘍だらけのレミングの群れのように、都市の人口の半分以上がそれに続いた。1349年の夏、ペストは北へ猛スピードで広がり、イングランドの田園地帯を覆い尽くし、混雑したノーウィッチとチェスターの都市を通り抜け、アイルランドのウェックスフォードへと押し進んだ。同年後半には、黒死病はスコットランドのエディンバラを含む、この地域の最北端の都市すべてを汚染した。

バラ色のリンパ節の周りに黒い輪ができ、腐敗を追い払うためにポケットいっぱいの花束を抱えたヨーロッパの3分の1以上の人々がくしゃみをして死んだ。

時は死にゆく者の目のように転がり、日々は死を目前にした者の苦しげな息遣いのよう過ぎていった。男も女も食料を求めて町を避けて暮らしていた。その代わりに、彼らは放棄された畑をくまなく探し、手つかずの森で獲物を狩り、山間の小川を探索し、冬を生き延びるのに十分な食料を集めようと必死だった。家族は戸口に身を隠し、戸口の外側を赤く印し、内側を重い石を積み重ねてしっかりと守った。農具は武器として隣接する壁に立てかけ、いつでも使えるように準備していた。そしてついに冬が到来した時、フランス中部の多くの住民は、侵入経路として戸口ばかりに気を取られ、天井の安全性にはほとんど注意を払っていなかった。

修道院の門石に棲む悪魔たちは、ブラージ枢機卿が目指した目的地、フランスの都市カレーとその占領軍であるイギリス軍には決して到達しなかった。代わりに、悪魔憑きの闇に突き動かされ、これらの空飛ぶキメラ像は、夕暮れのフランスの空をさまよい、同じように広がり、焼けつくような霧と共に広がり、やがてミュラ村の端に到達し、破壊の刃のように藁葺き屋根を突き破った。

ムラト村を壊滅させたその惨劇の重大さを最もよく理解できたのは、冥界のしもべの中でもごく少数の者だけであった。タルタロスの危険な領域に住み、ハデスの宮殿で監督役を務める、より年長で経験豊富な悪魔たちである。実際、彼らは地獄の口にするのははばかられるような苦痛を数多く企てるほどの自由を許されていた。大聖堂に飾られていた、はるか昔に死んだグロテスク像を所有するこれらの悪魔たちは

ルシファエルの呪われた軍団の単なる霊的な作り物。石像はかつての肉体と骨の存在に動かされていたわけではない。それらは容易に比較できるだろう。

それは、部分的に損傷した門石のポータルを通して邪悪な魂を投げ込んだ悪魔の霊が宿る「飛石」に過ぎず、大封印を構成する3つの門石のうち2つしか「解錠」されていないため、彼らの本当の姿はまだ地獄に囚われている。つまり、カンチェッロ修道院の門石が閉じている限り、大封印がどれほど弱体化しようとも、それは依然としてその役割を果たしているのだ。

神聖で意図された目的があったにもかかわらず、これらの冥界の悪魔は、憑依霊、幽霊、青い悪魔、インキュバス、サキュバス、その他邪悪な存在といった肉体のない姿でしか世界を苦しめることができませんでした。そして、地獄に追放されたインキュバスとサキュバスの数々（その数は膨大でした）の中で、ルシファエルはサキュバスの女王として君臨し、最大の拷問者であり霊的な姦淫者として、眠っている無防備な人間の息子たちに自らの姿と邪悪な欲望を植え付け、召喚されたエルジョとエリウドの子孫、すなわち地上の肉と骨でできた無数の存在を、彼女の邪悪な痕跡として世界中に散らばらせた。そして、彼女は彼らの安全を確保しようとする母性的な願望はほとんどなく、ラザロのように、彼らを自らの身を守るように放置しました。

自らの力で生き延びるか、避けられない夜明けによって滅ぼされるか。

それでも地獄は満たされなかった。またしても地獄のような年が過ぎ去る中、疫病はまるで幽玄な幕のようにフランス中部を覆い尽くした。そしてその終わりのない暗黒の時代に修道院の焼けつくような霧とさまよう石のグロテスク像の存在は、ますます広がる侵略と破壊の範囲を主張していた。そして1350年後半、ヴィック・シュル・セレとサン・フルールの村の住民全員が、カラスの大群のように夜空を覆い尽くすキメラのような悪魔の恐怖を目撃した。村人たちは悲鳴を上げて逃げ散った。しかし、少なくとも一人の犠牲者の顔に残されていると予想される恐怖の表情は、死んだ住民全員から著しく欠落していた。頭のない者は一人もおらず、散らばった遺体から離れた頭蓋骨は一つもなかった。そして、これらの大量切断は、生の証言がないからではなく、死に対する共同体の無関心によって、ほとんど語られることはなかった。結局、どの都市、町、村もそれぞれ独自の形で衰退しており、風下から漂ってくる悪臭は、疫病の生存者である移民に、あまり通らない道を選ぶように、つまり、あらゆる発生源を避けるように警告するだけだった。

悪臭。

それにもかかわらず、肉と衣服は白骨化した骨から剥がれ落ち続け、地獄の巧妙な策略の一つが終焉を迎えつつあった。たった一羽の鳥 悪魔に蘇った中国の鳩 から始まった大疫病は、人類の大部分を滅ぼすことに成功した。それは突然現れたが、消えゆく風に舞う灰のように消え去った。振り下ろされた剣や、無謀に唱えられた邪悪な呪文のように、疫病の広範囲にわたる死はヨーロッパのあらゆる血管を切り裂き、そして再び中心部へと戻っていった。

中国。死者の目からすべての硬貨が集められ、ステュクス川の最後の波紋が静まったとき、疫病は2400万人のヨーロッパの男女子供を塵に変えていた。中国では3500万人の魂が消え去った。インドとアフリカ大陸では数えきれないほどの人々が命を奪われた。彼らは皆、ルシファエルの黒リンゴ収穫の犠牲となった。しかし、無味乾燥な数字は、おそらく私たちが思うほど、このような人間の規模と歴史的規模を適切に比較する心を動かさない。

適切な視点から見れば、ヨーロッパの死者全員を一つの共同墓地に積み重ねたとしたら、その墓地の深さは3600マイル（約5800キロメートル）を超えるだろう。さらに、中国の死者全員を同じ墓に埋葬したとしたら、その深さは地殻の底まで5300マイル（約8300キロメートル）近くに達するだろう。

人類にとって、大疫病は深さ6フィートの穴よりも深く、底知れぬ恐怖よりも深く、最初に生み出された地獄の底まで達した。そして、中国中央部の三峡にある飛寺の道教の高僧と、彼に捕らえられた怪物が、大いなる深淵への三つの封印のうち最初の封印をあえて開けたとき、既知の世界の半分が死に至った。不幸な出来事がそうであるように、これらはすべて歴史の暗いページに記された出来事である。

【第12章終了】



この文学作品は

d専ら献身的に

エドガー・アラン・ポー (1809年 - 1849年)

—彼の遺志が私たち一人ひとりの心の中で生き続けることを願います—



~[GothicNovel.Org](https://www.gothicnovel.org)~